

## 特集

## 高齢期における認知機能と転倒

## 特集に寄せて

牧迫 飛雄馬

鹿児島大学医学部保健学科理学療法学専攻基礎理学療法学講座

今回の特集は、「高齢期における認知機能と転倒」をテーマといたしました。本学会の転倒予防学会誌の編集体制がリニューアルされて企画された特集の第一弾「人生いろいろな場面での転倒と転倒予防」に続く、第二弾となります。

これまで、要支援・要介護の原因は脳血管疾患が最多でしたが、現在では認知症（18.7%）が最も多いことが報告されています（令和元年高齢社会白書）。高齢期における認知機能の低下は転倒の危険因子のひとつとして知られていますが、世界的に高齢化が加速する現状において、認知機能の低下を有する高齢者に対する転倒予防の取り組みがさらに重要となるものと考えます。軽度認知機能障害もしくは認知症を有する高齢者における転倒の特徴や転倒予防対策に関する最新の情報を更新することは、読者の皆様によって有益となるものと確信しています。

本特集では、疫学ならびに臨床研究を主とする研究者の他、地域や施設での認知機能低下を有する高齢者を対象とした転倒予防活動に従事する専門家や実臨床家に執筆していただきました。

- ・杉本大貴（国立長寿医療研究センター）：軽度認知障害および認知症における転倒の実態：疫学データ
- ・牧野圭太郎（国立長寿医療研究センター）：認知症および軽度認知障害における転倒の特徴
- ・平瀬達哉（神奈川県立保健福祉大学）：認知症および軽度認知障害高齢者に対する転倒予防対策
- ・月井直哉（認知症介護研究・研修東京センター）：認知症本人の視点に立った転倒予防の実践

（敬称略）

前回の特集「人生いろいろな場面での転倒と転倒予防」で紹介されたとおりに、転倒は人生のさまざまなライフステージで発生し得る事象であり、転倒の発生するシチュエーションも多様です。そのため、転倒を予防するうえでは、各ライフステージでの注意喚起や対策が必要となります。一方、高齢期では加齢に伴って転倒の発生件数が増大し、怪我や障害の発生による社会保障費への影響も懸念され、今後75歳以上の後期高齢者のさらなる人口増加が推定されており、高齢期における転倒予防の重要性はさらに高まるものと考えます。

本特集では、執筆者それぞれの専門的な立場から、先行研究からの知見の紹介や自験データの分析に基づく研究成果、さらには実践例に至るまで、幅広い話題を提供していただいています。しかしながら、認知機能の低下を有する高齢者における転倒のメカニズムや介入の効果については不確かなことが多く、今後もエビデンスの蓄積が必要です。本特集がひとりでも多くの読者にとって、高齢期における認知機能と転倒およびその予防策について改めて考える機会となり、今後の研究につながるアイデアが創出されるきっかけとなり、さらにはその結果としてひとりでも多くの高齢者の転倒を予防する将来につながることとなれば、企画に携わった者として大変嬉しく思います。そのような日が近い将来に訪れることを切に願っています。

連絡先：鹿児島大学医学部保健学科理学療法学専攻基礎理学療法学講座教授 牧迫飛雄馬

〒890-8544 鹿児島市桜ヶ丘8-35-1

TEL：099-275-6775 FAX：099-275-6804 E-mail：makizako@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

受理日：2023. 7. 10